

特67

432

鬼を
形
界
佛
大
を
出
を
掛
た
る
人



浮世草子
第壹號

定價六錢五

091580-000-7

特67-432

浮世草子 第1号

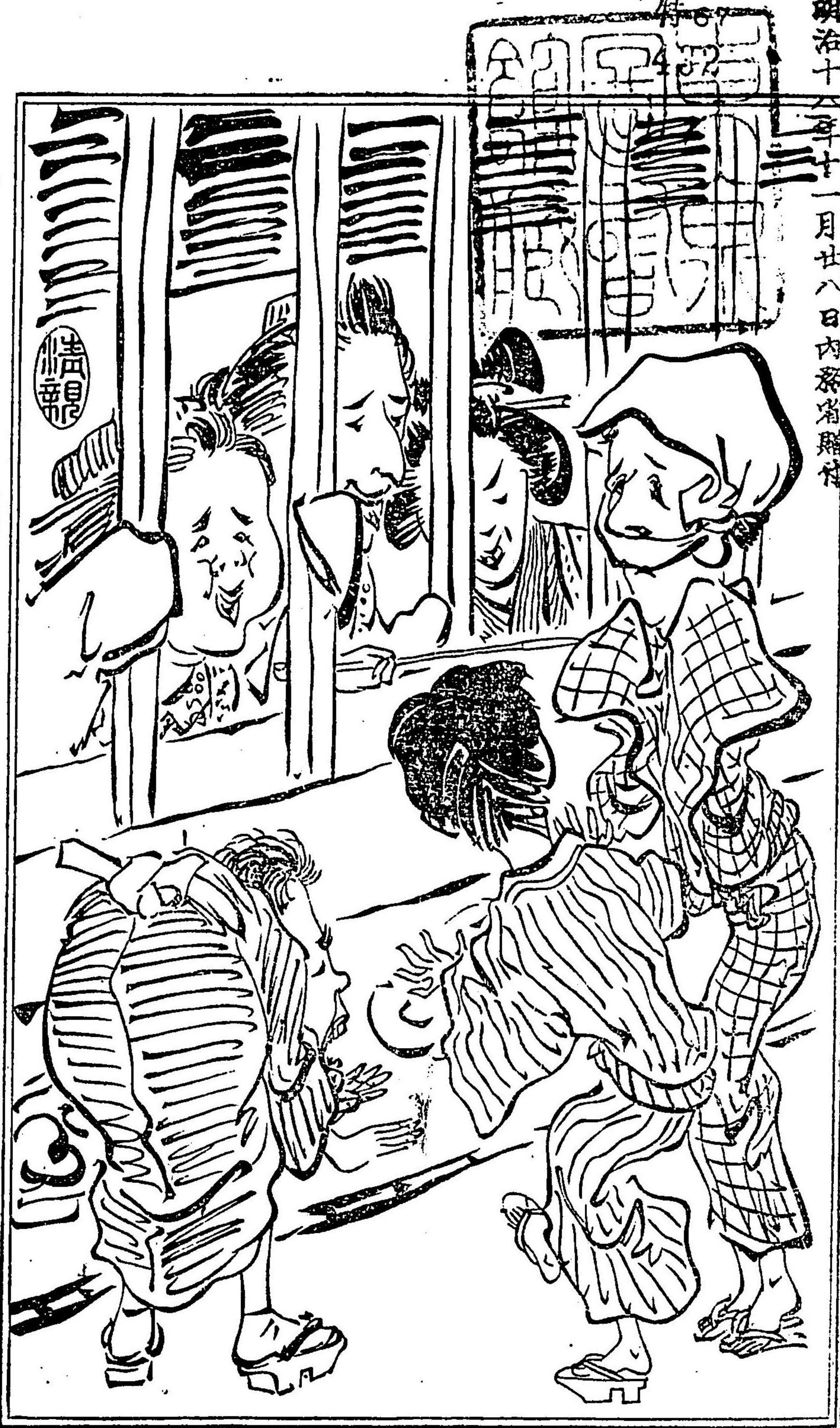
戸田欽堂/著

M18

DBO-0024



明治十一年十一月廿八日 内務省發行



浮世降参夫 第一卷 第一号

我何者か年哉
染たる母老いお滑り者
を病をかきり
狐宮を清仙石頭

浮世粹蕩夫第壹號

狐窟情仙 戯著

あの一めればがらくとあけゆく空の海原のつと出でたる旭影標子ふきまが能樂客も邯鄲榮華の夢枕阿房鶴一咲けられ暮口の口ゆんごりと玉面も盡きて重さの宿醒乃頭痛れみ興果て洒落もいでを逃るよふ品川れ小妓樓と立出で牛の尿十八丁の高輪一ピーガラれ陸蒸氣を見捨て迄多くり馬車に乗込むも女郎買ひの雑味曾汁空腹とゆり動かさき青息つきく懸て新橋ふ下り立つて日本橋さく歩行なるソモ此れ三人も當世の粹蕩夫とぞなる輩にて洒蛙吉鈍太刻三と能樂者の正札附き納涼のぶらつきからぐれ出の小妓樓遊びも互に懷中れ目張る目的と積鼻禪のはづき散財は喫驚ながら漸やく勘定とぬぐつて任立馬車(附馬どかねての人力車と云)の厄分よあらむこと迄の采しもの互に顔と見合とよげかへり何の話柄もあらむたゞ腹の虫がグーの音を出ださのみ時洒蛙吉こらへかね「ヲイれめへちの此空腹をうへへ歩く氣かれいらぬ最う一足もあゆべねへ今思へばゆうへ娼妓にかせられた餓飯を食つて置けよよかつたよ加之今朝の酒のせへか暮口同様よくどり腹とさくいるから叶の

ねへ鈍太「ナゼ喰ねへのご平常會餐家のくせよ洒蛙」そおの色師の注意で場所がらごからバクつくのを見つともよくねへからよ刻三「れきやアがれ餓飯は執念とのこて居ながら俄に自惚といやアがら何しろおら飯よりか熱燗で留飲はさげおけりやア口もさくくねへ何處ぞで一猪口やらかそふ洒蛙「ソリヤアいふ迄もなく遣らかしたのが飯は喰ふ錢さへ覺束ねへのご然一ロハで飲食が出来るよふ考でも就ひたのか刻三「此男いつまらねへ事といふせ此のせちがら世の中よ只でのみ食させる處が何處もあるんり錢を拂つてサ朝つばらでも河津が近ひから鮮魚もので酒が壹升よ腹直し濃味したものでゆしと喰ふとよふ洒蛙「ダがその仕拂と手前持つてるのか左様から恨みぞソレ彼地で大引前の勘定書がはんくらにせせて御豆一懸いご時何んといつ懐中ものをつひ忘れ今といつくる持合せがねへままねへが立替とくれといふからわいらと鈍公とがほんよ受けてやつと暮口の底を拂ひ候是しと外聞とぞらしたうへ勘定としたのを平氣で見過まとの頼母しくねへ了簡で刻三「ヲツトそれ恨みの去るとぞが心成乃一ほらしいところと先づ聞き給へ後朝乃當時よ得

手不愉快のあるもので親がよりから勘當主持から暇の身ぶりのふるいと一違ひ錢
一窮るやつごからグツト思慮と速くめくら一端錢文を豫備し置たりよ 鈍太「それと
奢るといふのか 酒蛙公まけとやらツしろふして發収握つ居る乃だ 列三「貳拾圓の
壹割が貳圓ごろふ其又た壹割ごから貳拾錢よ 酒蛙「何の事だ 御鄭重に敬の献立まで
いひ觸し置きたつと貳拾錢の持物か 列三「どころが其の貳拾錢札も今となつて
手放したのよ 最初はその心底で虎の子と積鼻禪を拵んで置たがつひいた機會で敵娼
の煙草盆乃抽匣へ置き土産よろふ計りて解るまい後學の心得もあるから教へて
置ふ昨宵の敵娼の中々の老練もんでおつふ氣と持せやアがるから一番ころりとさせ
て違ふと馬の子イヤ虎の子と思つた積鼻禪の貳拾錢札を彼の敵娼が名代へまじつた
留守よとつと煙草盆の抽匣へ入れて置て知らん顔の半兵衛とさめて寐て居たのよト
いふ心も今も敵娼が戻つて来りやア自烈体よ人乃心もしらぬいで寐くしまつとサ
とゆきぶり起し目覺しよ一吹あげよふあつと床よ身とふげかけながら煙草の抽匣と
あけると例の札が手よ觸れるから火影よまかしてどうして小札がこよあるだらう

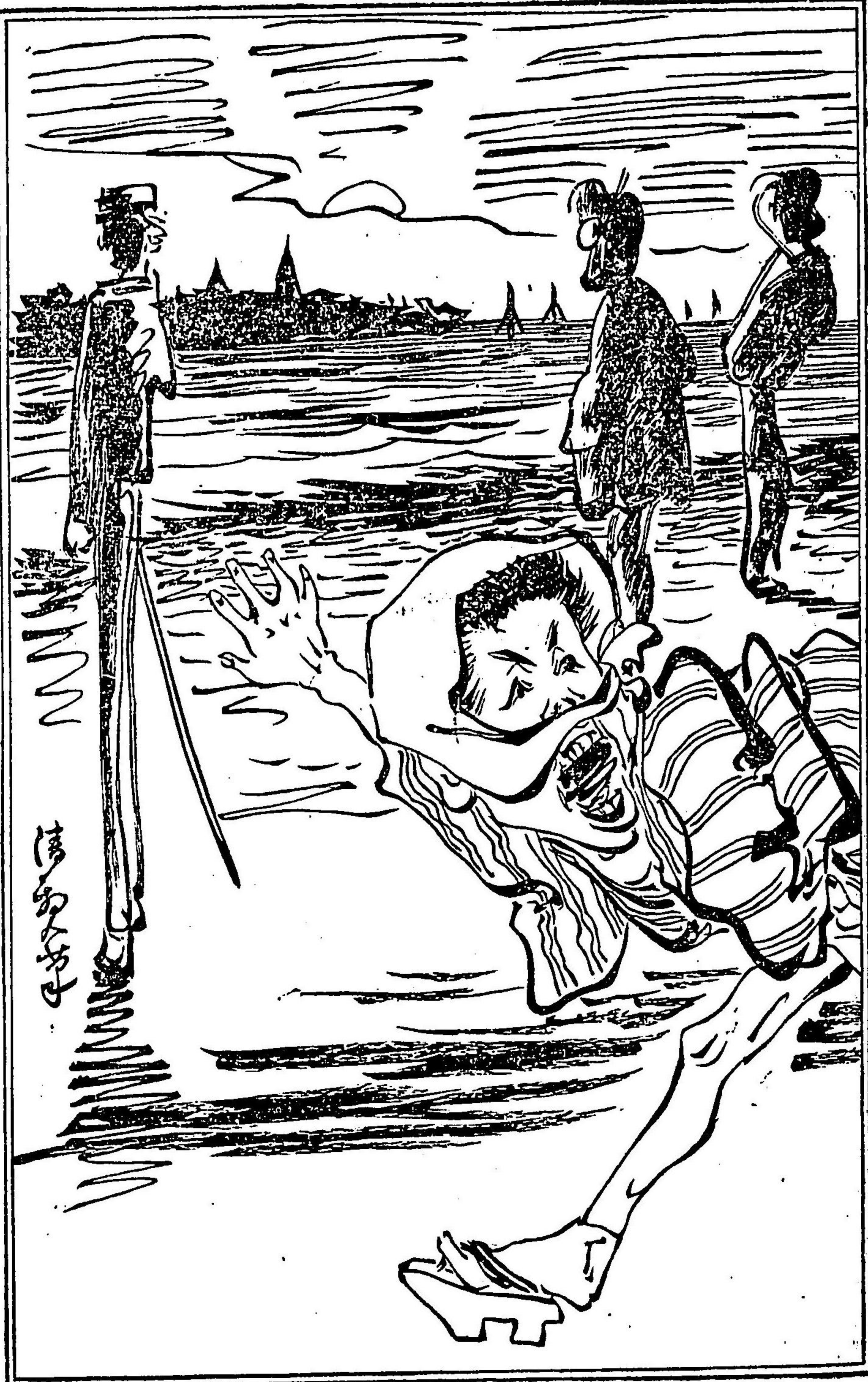
と思ふものゝ彼妓もさるもんだから直考つとつとや濟ふいよ初會から床花の御心
づかひとと禮といふとわいらのどこまでもいらとさつと禮をいささる覺へがねへと
ままして居るれよこらが女とこりりとさせる通客の秘事よところが昨宵を何や
く客が立込んで敵娼のそれおまたりで待ちくたびれて一と寐入いつか煙草盆の持つ
て行かれ貳拾錢のチヤアフウよ馬鹿々々しい目ふあつた 酒蛙「おいつの人の暇
か己いも察しねへでべんくと洒落やアから最う人の頼まねへと 列三「酒蛙「エ、
マ、ヨ斯ふしてくりやうと 酒蛙「不才乃野郎共ふの世話がや々
るどどふだ通人社会よ實際のひろいもれ何處も面識があつと不自由はしねへと
手よ握る小札をチヨイと見せびらが一痺りながらおめへたちふの錢一文れ工夫も出
来めへエヘンく 鈍太「ソリヤア貳拾錢を煙草乃箱に入れて煙よした刻公乃話よ
りの現よあるだたい、としたも乃、四五枚かねへよふだそれで三人乃飲食も足り
よふか繁とられたもんだ 酒蛙「それも氣遣ひ給ふ十僕が方寸ふあそだ 列三「ハテ子酒
も呑るか乃 酒蛙「勿論さ然し銘々も吾儘はいつちやアおさまらねへわいらは指圖通

りよて文句をい子へなら見事やつてのなよふ 刻三「ソリヤ面白い然いいら
 飯のいら子へが五合文のひつう々へ 酒蛙「ソレいふ口の下からうまだもれを万事
 たれふ任せて来なせへと酒蛙吉の小達の都合をつけより得意顔日本橋と渡り一
 町程も行き過ぎ左側丸花といふ字(花)の目印ある紺い暖簾をか、げし飲食店へ
 突と這入れハ折から小女が別五勺と叫びつ、給仕暇なき繁昌の枝の三人の漸やく
 諸客の間ふ膝を入れ烟草くゆらす傍らへ枝の小女が立寄つて御酒ですか御飯ですか
 御肴の甘煮酢章魚、ぬた、さんどんと口軽お呼立つるをさ、あへを 酒蛙「マツお味
 増汁でお酒とよ 刻三「姉さん御煙と極熱の頼み汁と言付やれば 程なく汁椀と膳にのせ 饑さ
 時ふ不味も乃なく酒とぐびぐび傾て汁とまゝるゝ餘念なき霎時話もどざれ一が早や
 酒汁も一滴のこさを酒のかきりと肴乃い、つけ何よするやと鈍太刻三の酒蛙吉が顔
 覗き込ハ酒蛙吉の胸勘定状おし居ついつこふかまいつけぬお姑息がり 刻三「マ
 イ酒蛙さん酒が子へせ呑口があくとゆるく、ていられ子へ 鈍太「肴も子へから
 何んが、付給へ 酒蛙「エ、置ま、ひおいらがい、よふ計らふから口出しの無用

だといつと小女に向ひ御飯とお汁のおかきりそふい香物を三人めへ 刻三「マ
 酒蛙さん何といふのだ御飯やア早や過る 鈍太「肴酢章魚が甘そふだぜ 酒蛙「叱々
 口出しの無用だといふのふよ黙ていおせへ何ふら腹をおせへ子へと毒だからよ 刻
 三「うれたといつと酒蛙「イヤサ約束やア子へかこゝにおれお任せする筈だふぐぐ
 づゆつちやア外見子へと云これて刻三鈍太の二人の顔見合せ跡で吞せる心であらふ
 とふあようぶあようお茶漬をかつ込や、二人りが糞果つる頃酒蛙吉の糞ひ任まいソ
 レ勘定と拾銭貳枚と小女お渡り五厘の釣銭手早く諸取りツイと立ち表へ出れば刻
 三鈍太の呆まつと小言たら、立出て 刻三「マ酒蛙公已お任せろなんぞと大把お
 觸て置おがら酒が一合汁が二えい香物で茶漬の惜子へ 鈍太「一合計りの酒の呑子へ
 方が勝手だふいめへましい 酒蛙「コレサ誤託をいふナさんを貳拾銭といふ切づめれ
 懐中で三人が吞食をまようといふ注文ごものどそふかといつと初手から明白お知ら
 したら諸兄等が落膽とまるだるうとそこの元帥乃氣配りて握てる小札をチラリと見
 せて四五枚あるだろふと考ぐらせよかそこで手軽く新花村と出か々たから大安

心で吞み初め少くも五六升の吞むことと思ひせ腹をこせへ子へて吞む許りの毒ぐ
 およつて早も中途でめいと食せると又思ひせて俄おひき上るおろといふ五分も
 かねへ處置ぶりおの恐れ入た後三「何んれつまら子へ一体々ふ限り質的のお
 めへが金融をまるなうの体ふも子へ役まじで奇らしい事だと思つたが案のよよう
 たつた貳拾錢乃時借か不見識ナ事ぞ「酒蛙」嫉むお「鈍太」然一貳拾錢でも日頃お似
 む酒蛙公が造たが妙だどふいふ筋かききてへもんだ「酒蛙」サ御尋ねならチヨツピリ
 本讀ふかろふか質の盆前の世話場で諸方おら矢書(芝居の河言借)が飛で来る一錢の
 よふよせえる獲救も出るので二三日まへ冬物と夏物の置かへよおれ横町の質屋へ掛
 合よいつたのよ老舗でいあり例年の出入場て番公どの親類附合ひよ捨利で質草状自
 由ようごかす位ぞそれだから此度け置置質有餘の見込が子へよ一ろ端金なら無理
 もいへよふと氣がついたうら出かけたのよ然一思ふ半分も出采あかつたよ(友達のわく
 大笑ひを)時よ斯ふ打そろふこそ幸ひ今日の根岸の洒落齋善樂を訪ひ吞たらぬ酒も吞
 て何がナ趣向して遊ばんものと頼相談とくのへ根岸とぞ一て行く道をがら又も

前宵のうらさとりく鈍太「斯ふよんべは今朝の不始末の前兆か諸兄等が知ら子へ
 苦勞をしたせソレ氷屋で相談が出来て新橋の停車場へたどり着といま發車といふ處
 で慌忙乗たるふそれだからうらかいらい小便を仕損あつて品川まで堪へくくヤレ喜
 一やと下車としと直ぐ用と足そふと思ふ間よ諸兄等のサツく早や四五間先さへ
 足早一行過るうらえぐれていと小便所ありながら通り越し行先よあらふとウカウ
 カ宿中へ米と時分の兩側へ燈がつき陰見世を張る最中でツンド陽氣む景色だろふ
 さささへホテリが来るとこ後だよ漏そふよあつて居るうら堪ら子へ慌忙て小便所と
 尋ねても見通しと處よあやうくあーさコリヤ何そ乃事と路次のくらがりへ走込ジヤ
 アジヤアと滴れ初めながら振り返つて諸兄等を呼び留よふとまると折悪しく向ふか
 ら夜目よもそれと見ゆる白出立の夏服で巡查がやつて来るうらコリヤ大變と鱧腰を
 してヒヨグリながら四五間歩み出して見かへれば早間近よ追て来と様子最うさまら
 ぬと駈出まどワンくと吹るから二度突驚見れば今度の白犬よいめへまーいから石
 を投げつけてやつとが考へて見ると馬鹿ナ談よ「刻三」ヤア道理おそ吹羅吉の三線て



濟世神藥 第一卷

おいらが棚の達摩と跳らふと見れば貴公がそつくり湯衣を脱いで真裸身で居るか
 ら幸ひその湯衣状かりて頭からまつぱり冠つて好手段よおどつともんだからヤンヤ
 とうけられたい、が其時なんだか肩先が冷りとして奇な臭ひがブンと鼻へ這入つ
 とと思つたが今聞けば歩きながら小便とされて濡らしたもんだらうエイ不潔ねと思
 ひ出して胸が悪くあるベツく、
 酒蛙「よーねへナ往來中で外聞が惡い諸兄
 等の話のいづも下がりて意氣筋の話もねへのか前宵の勘定時少し誤多つひて見
 よくもあかつたがそれをお互で前後もくといふにかれ許りだろふ刻公の貳拾錢札
 の成行から敵娼の采ねへ事を白状して鈍公の向ふ隣の名代部屋に寐居るから
 終夜の様子の手とる如く夜中二階に婆さんと呼付て甚助の小言が聞へたそれか
 らも小咬と灰吹の誓のみでさだめ語の聞へあかつた其上おれの口から斯ふ云も異ま
 もんぞが諸兄等へ出た妓の鬘弄箱と轉覆かへしとか鳥の市の賣物もよろしくサとこ
 ろでおいらの敵娼手古鶴を小格子におかしい代物よ實に諸兄等一氣の毒なのみか采
 合せの他客へも甘膏からおれの處へ入りびりよりナンダと名代もねへ不流行の女郎

ぞからぞと云のかおさやアがれ嫉妬へあんれ因果か女の方から初會惚れて勘氣はあ
 れて扱はるゝ五月蠅事だ現におめへたちも勘づひころふ引附の最初から妓娼の
 差かしてふ顔と背けおいらの方許り流し眼見とれて居るふ惚と心の素人も同
 様よナニその答だともふとも出た客が色男でつくりも意氣とさくいるから先の惚る
 る無理のねへと兩人と相手夢中になつて喋りちらさるも名詮自證の酒蛙吉が昨夜の
 事からけふこそ充分兩人と畏縮まを好首尾ありと思ふよおそ
 らみれて左の頬に紫色の大痣ありてニ目と見らぬ顔色なまども白粉を濃くつけて夜目をつくらふのみか心かけて顔と
 背けある方を客に見せすチヨイと半面のみ見せむかき思ひつかると愛敬もあまど一度かつた客も二度は来たらず御茶
 引く夜多くなま酒蛙吉を客にすせたいがいに勤めしを酒蛙吉の自惚て萬事心付くを刻
 三鈍太のとくよりやぶにらみ怒ある等を見出し承知の事なま心にくくむせして
 古鶴が眼づかい乃一方へうとせんところの充分酒蛙吉一氣あり名古屋どろふのふ
 鈍さん 鈍太「ろふともそふとも何ししてこ鶴の御互乃敵娼のよふ十通例の面だね
 へかこり者ぞから酒蛙吉の實に仕合せもんだらう人化當分の外見の博物館の上等出
 品乃價直の大丈夫ぞ 刻三「おいらの又と痔持の穴と寫真と撮らあんなもんだらう
 と想像もど痔のうけごと酒蛙吉にいづ酒蛙「何もあれしきナ女に惚れられさどく免や角ふ

まよふと御見うけもふしから無禮うの去りいせんが呼びよあげいたマア醒る
 まで横におつといまま一と手とつと金屏風乃圍つゝある錦乃蒲團乃上へ誇ひ新造
 と共ニ手傳と寐衣お着替させと酔醒れ水まで差圖してあまへはあはせるなど初會
 ふのあるまじき仕打で自身も柄襦を抜で衣衾へおげのけ萌立つよふ十緋縮緬れ下衣
 へ同じ緋縮緬れ細帯としどけおく前で結びおいら乃寐姿と瞥と見おがら御免おん
 と寄添ふで烟草をつけお出おがらふふやア初會うら斯ふなれくくもふい
 たら下げすみなんようがといひうけ口籠ることガ千万無量よフイト思ひ出し
 たよふよいつそぬいの罪お人さまと枕乃下へ越路れ雪もよろしくといふ細ひ手と
 さー込んで夜着でうつくしい顔とチヨイと隠した其れ場れ爲体のいま思ひ出してさ
 へ此体がぶるくくと震るへらア然しれめへたちるうる情人扱ひの夢も出合た事
 が子へから察しうといつても察しられメヘアホン色男の誰があるだらう 刻三「ヤ
 アく黙つて聞いてはりやアゆと事ふいゝ圖法も子へ熱と吹くぜ 鈍太「よー子へく
 餘り大さお齊と一馬鹿を云ふもんだから往來人が指とさしてクツく」と笑つて行

くぜおいらの一處に歩く事いやよおつた 洒蛙「ハテ高談の俚言も入らむだ然し話
 かけて休めおまると癖病おなるとよ最ふ暫時は御耳拜借此度の濡れ場でおく派出
 お話だからさし給へ 刻三「聞く違るめへもれでもねへがいづれ受け賃のまつかり
 奢るだろふダが高調子に談されくの道づれおいらまで馬鹿見へるから御免んだ
 ヨ 洒蛙「借てそ乃翌日の後朝乃うらみと他方おブン流し陀々羅遊びは大陽氣時の初
 春勿々てお乃肉乃となればや羽根としてあどけ子へ遊びとよふと男女藝者が麻
 下ふつどひ打戯るゝ面白サ洒落もだんく 蕪けて来て羽根を落した者れ顔をかたい
 お墨と塗りつおとわいらの乃行司で墨塗りれ且那役彼乃櫻川乃善公なんがの寺子
 やもよろしくサとところで其頃れ見番れ藝者の承知でもあらふが一樣面白裕といふ着
 附だろふアレいやでまときヤアくいつて逃るを追かけ追まこく塗るもんだから
 真白乃顔れみか白袴迄も墨だらけよ賢お二階も崩るゝ大騒でそ乃入費が總花總仕着
 せ戸障子乃つくりひ内証へれきたりくゞ壺箱程もかゝつた校の紀文が節分お金をま
 いた以采乃全盛と靡れ評判とりくゞよまぞといふのこ乃間色々乃妄想と起しおがら

